ダンサーを目指す学生たちに向けて

教授　小山 久美（バレエ）

はじめに

短期大学部のバレエコースは、プロフェッショナルとして通用するダンサーの育成という目的で設置されている。現在、日本のバレエダンサーの養成は、いわゆる公的な教育機関がほとんどなく、個人のバレエ教師に全面的に委ねられているのが現状である。本来は、海外のバレエ学校のように初めてバレエに取り組む 8 歳～10 歳からおよそ 18 歳でバレエ団に入団するまで、一貫した学校教育を施すことが理想であると思う。しかし現在の日本の事情ではまだそれは夢物語のような段階であり、そのなかで基本的に 19 歳～20 歳という遅い年齢であるにせよ、大学という教育機関においてダンサー育成が組み込まれたことは、今後の日本のバレエ界発展につながる可能性を含んでいると考えている。

まず、私が把握している範囲で日本のバレエ団が新入団員を受け入れる際の状況を説明しようと思う。定期的な公演活動を行い、且つ文化庁の助成金やスポンサー企業からの支援を受けるなど外部からもそれなりに評価されているバレエ団というのは、せいぜい 15～20 団体で、そのほとんどが東京に集中している。近年の傾向として、日本のバレエ団でも海外のバレエ団のようにオーディションによって団員を採用するところが増えている。そのようにして入団した新入団員のうち、バレエ団付属のスクールで育ってきたダンサーたちは、バレエ団の活動をずっと傍らで見ながら育っているので、それに順応するのはそれほど問題がないかもしれない。しかし、地方の小さなお稽古場で育ってきたようなダンサーたちというのは、まず自分よりも年長者の先輩にあたるような存在がない場合がよくある。つまり先生のほかは小さな子どもたちしかいないのである。その先生自身もバレエ団で踊ったことがないような場合は特に、バレエ団の活動そのものがどのようなものであるのかも知らないため、プロのダンサーとしての心構えも著しく欠けている場合が非常に多い。子どもたちの発表会やコンクールしか経験したことがないためだと思われる。仮に踊るためのテクニックが十分であったにしても、あらゆる面で団員としてやっていくためには、結局 2 年くらいの見習い期間を要してしまったという例は、私のまわりでも何度となく見受けられる。

そこで、それならばこの短大における 2 年間というものをその見習い期間に準ずるものとして考え、年齢が遅いことのハンディを肯定的にとらえてはどうかと考えている。まだまだ‘小さな頃からのお稽古事’という概念が強い段階から‘プロフェッショナル’になるための移行期間、その「橋渡し」をすることに位置づけようと思う。テクニックの不足分を補っていくとともに、バレエ団の舞台に対する姿勢や取り組みを伝え、技術面と精神面の両方の点でバレエ団員として通じるダンサーを育てることが目標である。

教育の指針

具体的な教育指針としては、まず次の 2 点を入学時や授業の合間など折々の機会に学生たちに伝えている。

１．休まないこと

学生から社会人になるというあらゆる場合において、もっとも大事なことと言えるかもしれない。バレエ団においても然りである。毎日欠かさずレッスンをするというのは、ダンサーにとって極当たり前のことであり、日常のクラスを休めば当然それは身体にもあらわれてくる。プロフェッショナルとしての自覚に足りないとみなされる。また、公演のためのリハーサルというのはいろいろな状況が考えられるが、いずれにせよ「常にそこにいる」というのは大きな意味を持つ。リハーサルを施す側にとって、「いない人」はどうにもならないのである。教師や演出家からの信頼感にもつながる。休まないために、自分の身体に責任をもって心身ともに健康であるように努めなければいけない。

学生にはもしレッスンができなくても身体の許す範囲で見学に来るように指導している。寝坊したならば遅刻してもよいから顔を出すようにとも伝えている。「いない」のと「いる」では大きく違うし、少しでも出席しようという態度で意思表示をすれば信頼関係も生まれる。誰でもつらいときはあるから休みたく思う日ももちろんあるだろうが、「1 日くらい」と思ってしまったらダンサーになるのは難しい。そのようなときでもとにかく頑張って来ること、極端な言い方だが、態度が多少悪くてもかまわないから来なさいと言っている。ゼロにさえしなければ、少しずつ積み上げていくことはできるわけであるから。

２．自分の意思を表すこと

舞台人として生きていくなら絶対必要なことだと思う。それぞれの性格はさまざまで、おとなしいタイプや積極的なタイプなどいろいろあるのは当然だとしても、舞台で何かを人に伝えることを目指すならば、やはり最低限自分を表現することは求められる。踊りにおいて、ただ漠然と踊るのではなく、「自分の何を見せたいのか」を考え、何かを外に向かって表さなければいけない。やる気があるのかないのか、踊ることが好きなのか好きではないのかも含めてである。舞台での存在感につながることはもちろんだが、むしろ舞台人として持つべきマナーであると思う。そして、日常の態度からもやはり自分の意思を相手に伝えられなければいけないだろう。舞台の上ならできる、というのはありえないし通用するはずがない。自分自身がそのような意識をはっきり持ったとき、踊りも上達していくものである。

問題点

次に、バレエという専門分野における観点から、入学してくる学生たちが抱えている問題点とその指導について述べる。正しい姿勢や脚の使い方、腕の動かし方、トウシューズの立ち方など、より専門的な見地からの問題点ももちろん山ほどあるのだが、今はもう少

し大きくとらえた点を取り上げてみる。

Ａ．音楽

音楽に合わせて踊る、という誰でもが知っている基本的なことが、実は分かっていないしできていない。小さなお稽古場では、生のピアノ伴奏によるレッスンというのは皆無で、CD やテープで行われていることが原因のひとつでもあると感じている。いつも同じ音楽で同じテンポであるから、音楽を聞こうという意識も生まれないし、合わせるという感覚も非常に乏しくなるのだろう。音楽に合わせることよりも、たくさん回ったりバランスを長くとるほうが重要という認識さえ見受けられる。まずは、この間違った考えかたを訂正して音楽がいかに大事かを指導する必要がある。音楽と一緒でありそして正しいリズムをもった動きでないと、ひとりよがりの動きになってしまうし、演出家や作品の求める動きができないからである。

Ｂ．作品

世界のバレエ団が上演している作品を全く知らないという問題点がある。プロフェッショナルなダンサーたちが何を踊っているかも知らずにダンサーになりたいというのは、つじつまが合わないしあり得ないと思うのだが、現実である。20 世紀を代表する振付家ジョージ・バランシンも知らないという学生が数名もいることを発見したときは、心底驚いたものだ。先に述べたように、発表会やコンクールしか知らず、バレエ団が行っている公演を観に行っていないということが理由であろうが、実際地方の都市では公演自体が限られているという現状もあるのだろう。DVD などを利用すれば可能かと思われるが、指導者の側にもそのような意識が乏しいのかもしれない。発表会の演目と公演団体が上演する演目は根本的に違うという認識が、バレエ教育の現場に浸透していないのだと思う。

Ｃ．コールドバレエ

このように地方の小さなお稽古場の出身者が多いと、そのほとんどの学生は自分のお稽古場で、「一番上手な人」であり常に主役のパートばかり踊ってきたという学生が少なくない。また現実には、まわりには小さな子供ばかりで同じような年齢の仲間も非常に少ないという事情もあり、つまりはコールドバレエ（群舞）の踊りはやったことがないという学生がほとんどである。一糸乱れぬ美しいコールドバレエをつくるには、身体の角度、呼吸の合わせ方、手足の動きや流れなどの基本を、それぞれが共通認識として身体に覚えこませている必要があり、バレエ団に入るためには最低条件となる。バレエ団の人員としてはまずはコールドバレエを募集するからだ。授業で初めてコールドバレエに取り組むと、列さえ並ぶことができない学生がほとんどである。

以上の点が、短大バレエコースに入学してくる学生たちの多くに共通して見られる問題点と言える。次には、この点に対する取り組みと手法である。もちろん個人個人が抱えるテクニック上の問題点は、また別に対応していかなければならないのでそれについては除外している。

問題点克服への手法

Ａ．音楽

実技の授業は、常にピアノ伴奏とともに行われている。時には、学生たちに音楽についての質問を投げかけたり、その曲を細かく分析したり、カウントを一緒に数えるなど、ピアニストさんの協力を受けながら授業をすすめることもある。

また、音楽大学に設置されたバレエコースである特色を生かして、バレエコース全員の生徒に音楽教育が施されている。ピアノ個人レッスンまたは鍵盤演奏表現のいずれかとバレエ音楽演習が必修となっている。ロイヤルバレエスクールなど、世界の著名なバレエスクールでも教育の一環として楽器の演奏が組み込まれており、この環境は本学バレエコースの大きな強みになっていると思う。

共同研究 2 年目においては、バレエ音楽演習がバレエ実技と連動するような試みを導入した。たとえば実技でタランテラやマズルカを学んでいる時に、音楽演習の授業でもタランテラやマズルカのリズムをその背景や論理的観点から学べるよう、音楽演習担当講師と連絡を密にし、可能な限り同時進行で連携された授業を目指したのである。学生たちにとっては、それなりに合点がいく点が多かったようで、音楽に対するより深い理解度に結びついたと感じている。

また今年度末の卒業公演は、オーケストラ演奏による上演という非常に恵まれた環境で行われた。生のピアノ伴奏による通常授業から発展した集大成と言えるだろう。芸術家の養成というのは、最終的には理論的なものより、肌で感じ心に触れ身体で納得する部分が大きいのではないだろうか。その意味でオーケストラの演奏とともに舞台で踊るという経験は、卒業生を送り出す際の大きなプレゼントとなっているはずである。

Ｂ．作品

共同研究 1 年目の卒業公演で初めてライセンスのある作品を取り上げた。バランシン振付「セレナーデ」である。世界各国の 50 以上のバレエ団で取り上げられたバランシンの代表作品で、ダンサーなら当然誰でも知っている作品である。世界の著名なバレエ団と同じ指導者を招聘教授として招き、3 週間にわたって指導を受けた。学生たちが今まで発表会の場で踊ってきた作品と根本的に違うことは、ダンサーが作品に合わせて変えなければいけないということである。おそらく発表会では、踊る子どもたちに合わせて振付を変えたり人数を変えたりしていたことと思われる。しかし、このような本当の「作品」というのは、振付はもちろんスタイルも定められておりダンサーはそれに順応しなければならないし、それができないダンサーはキャスティングされない。また出演人数も当然決まっており、卒業生だからといって全員がこの作品に出られたわけでもない。バレエ団というものに直面するよいチャンスになったに違いない。

その手ごたえから、今年度も卒業公演の演目のひとつに同じバランシンによる「ワルプルギスの夜」を選択した。昨年度の「セレナーデ」において残念ながら選抜から外れた学生たちが、今年こそはと初めから力強い決意で練習に取組む姿を見ると、やはり厳しさを与えたことも間違いではなかったと確信した。妥協を許さないライセンス作品だからこそ生まれる価値であると思う。

C. コールドバレエ

ソロではなくまわりと合わせながら踊る、という授業は入学後１年生からすぐに始めている。「合わせる」ためには、音楽を聞くことがいかに重要か、基本的な正確なポジションがいかに大切か身をもって知ることになる。そこで初めて毎日の基本レッスンの重要性をあらためて確認し、日々のレッスンに立ち戻って自分と向き合うようになって欲しいと思っている。短大バレエコースでは１年間に３回ほど観客の前で踊るチャンスがあるが、その際は必ずこのようなアンサンブルの作品を取り上げている。学年やクラスといった仲間とともに息を合わせて踊る喜びを、是非体験して卒業していってもらいたいと願っている。

前述の「ワルプルギスの夜」は、いわゆるコールドバレエの形態を含む作品であった。招聘教授による指導は、ソリストだけでなくコールドバレエひとりひとりにまで厳しい指摘が飛んだ。そのほとんどが基本的な注意であり、いかに日々の基礎レッスンをおろそかにしてはいけないことが身にしみて感じたことであろう。バレエの基本をはずしては、コールドバレエが美しく揃うことは不可能である。「基本に忠実に」、とは誰でも知っていることだが、その言葉の持つ重みをダンサーは認識しなければいけない。私自身もやればやるほど基本に立ち戻る意識が強くなるのだから､若い学生たちに是非伝えたいことである。またひとりの乱れが全体にも及ぶこと、全員が心をひとつにしないと良い舞台にはならないこと、などコールドバレエから学ぶことは大きいはずである。

短大バレエ―コースの教育

短大バレエコースを受け持つようになって３年が経とうとしている。学生たちの個性や能力は学年によって違いがあるので､毎年演目や授業の進め方は見直す必要があると思う。しかし新入生が抱える未熟な部分は、年度をめくってもやはり大なり小なり同様であると見受けられる。

そしてもう１点、短大教育を受け持って私が感じていることを最後に付け加えたいと思う。

それは２年生になると学生達が一様に変化する、ということである。もちろん良い方向へ、である。ごく当たり前のことと思われるかもしれないが、「今年の 1 年生は少々大変かもしれない」と思っても、2 年生になるとそれなりに変身し、それが毎年続いている。入学時の個々の実技レベルの差だけではなく、取り組み方、洞察力、探究心などが組み合わさって態度や意欲の変化へつながり、学年全体の在り方として見事に変わるのである。

自分自身を振り返り思い当たる事がある。かなり前のことになるのだが、文化庁の在外研修員として２年間アメリカへ派遣していただいた際､出発前に多くの方にこう言われた。「留学しても１年では何もできないわよ、慣れたところでおしまい。２年あるのだからしっかり勉強して来なさい。」そして慣れないアメリカでの生活が 2 年目を迎える頃、確かに自分の中で手ごたえを実感するようになったのである。不自由だった英語もいつの間にか頭の中から英語で考えるようになり、それに伴い態度も積極的なものに変わり、留学生活を颯爽と謳歌した（気分でいた）ものである。

その頃から「2 年目」というのは「何かあるかもしれない」と感じていたことではあるのだが、短大教育はまさしくその期間にあたっている。2 年生に起こった変化は、ただ単純に卒業が現実的なものとして目前に迫ってくるという時機の問題、または年に一度の卒業公演という大きな舞台を経験した後、という理由だけかもしれない。それらももちろんプラスされることであろうが、しかしそれだけではなく、私自身が感じた 2 年目の内面に起こった変化を「2 年目特有の可能性」として捉え、学生達が膨らませる変化の芽を察知して育み、短大教育期間を最大限に生かして指導に携わりたいと考えている。